

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370672

研究課題名(和文) プラグマティックな立場から文学教育を融合した新規的英語教育の原理と授業案の構築

研究課題名(英文) Novel Educational Principle and Pedagogy with the Integrated English Education and Anglophone Literature Education on the Basis of a Pragmatic Stance

研究代表者

鈴木 章能 (SUZUKI, Akiyoshi)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：70350733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本で働く様々な職種の人々は「実用英語」を求めているようだが、彼らへの聞き取り調査から、学生には英語で書かれた文学を読んで学べることを求めている。加えて、多様な文学を比較のまなざしとともに読むことは、グローバリズムとともに西洋中心主義の社会に変容しつつある現代社会において、弾力性のある人生を構築することに資する。教育学や脳科学の見地からしても、職業教育主義となっているいまの日本の英語教育は文学を融合させてバランスをもつことが重要である。こうしたことから、現実的な立場に立ち、文学教育が融合した英語教育の原理ならびに実践案を構築した。

研究成果の概要(英文)：Authentic voices in Japanese workplaces, which, it is assumed, require only “practical English,” require abilities students can learn by reading Anglophone literature. In addition, comparatively reading cross-cultural literature assists students and others to build a resilient life in an increasingly westernized and globalized environment. From the perspectives of education and brain science, too, English education should be balanced through the inclusion of literature, especially in current Japanese education dominated by vocationalism. From the above, based on the pragmatic stance, I organized educational principle and pedagogy with the integrated English education and Anglophone literature education.

研究分野：米文学、英語教育

キーワード：英語教育 英米文学 世界文学 授業案

1. 研究開始当初の背景

2009年度～2011年度の科研費による研究において、様々な職種に勤める人々に英語の必要性和具体的な使用実態を調査する中、英語は必須であるが英語が使えるだけでは全く駄目であるとの回答を複数得た。そこで、英語以外に何が必要かと尋ねたところ、仕事上の専門分野の知識を別として、大きく次の4点にまとめられることが英語でできることという回答を得た。(A)文章を正確に読むと同時に、文章の意味を多様に解釈し、既存の考えを刷新していく創造力、(B)日常を日常の外から眺める批判的眼差し、(C)文化的差異(感性、審美感、思惟様式、慣習等)を比較して理解し、解釈の地平を拡大し、それを用いる能力、(D)人間的豊かさ(他者の立場に立ち共感することを含む)。これらの意見は文学を読んで学べること、ならびに文学者の主張に一致する。(A)は広義の意味での「文学」である。同時にイギリスの小説家ハクスリーが、読みの量に対し、読みの質の重要性を論じた「スローリーディング」に相当する。(B)はアメリカの小説家エマソンが“Circles”というエッセイで述べた「文学の意義」に相当する。(C)はイギリスの小説家ロレンスが“The Spirit of Places”の中で述べた文学の意義、つまり「地域の差異と人間の差異を読む」、あるいは比較文学の意義に相当する。(D)は文学の読みに附随する共感や他者の理解に相当する。要するに、グローバル社会で生きる人間を育てるため英語教育が重要であると主張すればするほど、文学教育、とくに比較文学教育が重要であることが聞き取り調査からわかってきたのである。

2. 研究の目的

現在、英語教育と文学教育の融合を巡る議論が活発化しつつある。だが、文学教育の必要性については理念が先行し、かつてのような英語教育における教養派と実用派の議論が再燃しつつある感がある。この二項対立を打破すべく、本研究では、上記「1. 研究開始当初の背景」で述べたことを受けて、日本の様々な職種に従事する人々に、英語教育における文学教育の必要性、意義について具体的な聞き取り調査を行った上で、英語教育と文学教育を融合する教育原理、ならびに授業案を、「世界文学」という新しい文学研究・教育の知見から考案する。これは漠然とした文学教育の主張でも理念先行の主張でもなく、これまでに無かった現実社会での聞き取り調査から得た知見に基づく新規的研究であり、英語による文学の学びの意義や理由、目的をプラグマティックに明確にした上での研究である。

3. 研究の方法

英語教育における文学教育の重要性について、「実証」、「最新の世界の動向と理論的

裏付け」、「日本の実情に合わせた英語教育と文学教育の融合」の三点に力点を置いて研究を進め、それらの成果を踏まえて、具体的な授業案を考案する。

(1)英語教育と文学教育を融合する意義について、その実証性を高めるべく、幅広い職種の人々に聞き取り調査を行っていく。

(2)理論面は、英語教育と文学教育の世界的動向、世界文学の理論と教育方法、教育学の見地から、総合的に研究を行っていく。

(3)他国で生まれた理論はその地域の実情を基に生まれたものであるため、理論研究の成果は日本の実情に合わせて工夫して具体案を考える。

4. 研究成果

(1)聞き取り調査

前記の2009年度～2011年度の研究で聞き取り調査を行った企業の中から80職種の企業に英語が真の意味で使えるのに必要なことを尋ねてみた。結果としては、前記の(A)～(D)に挙げたことに包含されることが英語でできることという回答を得た。

(2)職業教育主義と数値管理主義

聞き取り調査とは別に、職を転々とする青年の話聞く機会を得た。彼によれば、「自分が幸せを感じられない仕事で他人を幸せにすることはできないはずだが、自分が幸せを感じられる仕事が見つからない」という理由で職を転々としているとのことであった。しかし、考えてみれば、自分が好きと思う仕事をしていても、同僚も顧客もだれも笑顔にならない、だれも感謝してくれない場合、その仕事をするに幸せを感じるなどできまい。仕事も続けられないはずだ。「自分が幸せを感じられる仕事」とは、仕事の内容それ自体にあるのではなく、他者が幸せを感じていることを認識できる仕事のことであり、他者の幸せを感じることが「働ける」、「働く」ということの要件である。そして、他者の幸せを一義にすればこそ、自分が行っている仕事や自分の行動等を、時に振り返って考えることもできる。これがいわゆる批判的思考の原点となる。

ところが現在の教育は「職業教育主義」(vocationalism)といわれるもので、他者の幸せへの視線を置き去りにした教育が行われている。つまり、雇用に有益か否かという観点からカリキュラムや授業内容が策定され、偏狭で自己に閉じた知識や技術獲得を目指す教育が行われている。学習者もまた雇用への有益性を一義にする傾向になっている。ここで問題となるのは、職業教育主義は、実際には「働けない人」を育てている可能性が高いことである。職業教育主義における英語教育では、他者の幸せはおろか、職場の人々が言っている前述の(A)～(D)のことを英語で行えるようにすることなどほとんど考えず、TOEIC等のスコアの上昇を目的とする授

業になる傾向が高い。TOEIC 等のテストそれ自体がいけないということではない。問題は、英語の出来不出来を数値管理するあまり、真の英語力ではなく英語の点数の上昇を目的とってしまう点にある。ただし、TOEIC 等の点数は、大企業では英語力の証明というよりむしろ、将来的な努力可能性の保障として捉えられる。また、中小企業では、先に述べた(A)～(D)のことを英語で行える学生を即戦力で雇いたい。ゆえに、TOEIC 等の点数の上昇を目的とした英語教育は、英語を用いて働く人を育てることにはあまり資していない。

ところで、他者の幸せへの視線を失った教育の失敗は、すでにアメリカのロースクールに指摘されている。アメリカでは法曹界の仕事に不満を抱いている人が少なくない。それは、法曹界の仕事が裁判の勝利を一義とし、当事者の情意を軽んじる点であると指摘される。これはロースクールにおける職業教育主義の結果である。そこで、ロースクールにおける「文学運動」で教育の課題の克服が試みられた。文学は、法律家の日常や仕事を批判的に描いているものが多い。そうした文学作品を読むことで、将来、自分がどのような法律家になるべきかを考えさせる。こうすることで、秀でた知識や技術だけでなく、当事者の情意をも汲む法律家を育てている。先述のエマソンは、文学は日常に埋もれた自分を見つめる足場を作ってくれるものと、文学の意義を述べたが、ロースクールの文学運動はエマソンの主張にも一致する。

以上、(1)ならびに(2)で述べてきたことから、真の意味で英語を用いて働ける人を育てるために、英語教育と文学を融合した教育が有用であると考えられる。

(3) 世界文学と経営学

ところで、文学の読みは、20世紀後半における文学理論の隆盛によって、文学テキストを読んで自分で考えたり解釈したりするより、文学理論から文学テキストを分析するようになった。また、文学テキストの意味を考えること自体が無用であるという考え方もある。こうしたことによって、個々が文学テキストを字義通りに読んで解釈し考えることが批判的に捉えられるようになってきた。教室から文学の読みを追い出した要因の一つでもある。だが、21世紀の初頭、文学の読みの復権が再び唱えられるようになった。それが世界文学という文学の研究・教育であり、世界的に支持を受けつつある。世界文学の定義や台頭の理由・歴史は割愛するが、世界文学の要諦は次のとおりである。ある地域に生まれた文学テキストの中に国境を越えて読まれるものがあるが、そのテキストはなぜ国境を越えて読まれるのか、その翻訳可能性やテキストの変容などを考えることである。具体的な研究や教育の方法は様々あるが、その中の一つに、文化や政治といった条件の差異を超え、人類が共有できる問題、共感できる

事象を考えるということがある。また、文化や政治などの差によって共感理解できないことを多元的・多角的に議論することで理解していくというのもある。つまり、文学テキストをグローバルな視点とローカルな視点から多元的に読み、自分で考え、議論し、自己を振り返りつつ他者を共感理解していくのである。こうした読みは、授業で他国の文学テキストを用いて、先述した(A)～(D)の能力を育むとともに(2)で述べた視点を得るのに寄与するものである。また、上に述べた世界文学の読み方は、グローバルとローカルな視点を軸にしているゆえ、経営学の国際戦略の理論にも通底するものである。世界文学の読み方をもって英語で書かれた文学を読み、その読みを国際戦略の理論にもあてはめることで、真の意味で英語を用いて(他者の幸せを考えながら)働き続けることができるグローバル人材の育成、ならびに世界平和の促進が期待できる。

(4) 頂上タスク

もっとも、文学を英語教育に用いるといっても、ただ読んで訳すというだけでは不十分である。英語の授業では、「読む・書く・話す・聞く」の4つの能力を向上させる必要がある。そのためには、文学テキストを学びの対象とするのではなく、文学テキストを利用した学びを考える必要がある。そのためには、英語やテキストを用いて、授業の最後に行う「頂上タスク」を設定することが有効である。たとえば、「他者の受容」を頂上タスクに設定する。具体的なタスクとして、相手の長所を見つけて英語で褒め合う会話をさせる。そのタスクを実現するために必要な英語表現や文法等を学べる他者の受容がテーマとなった文学テキストを選定する。他者を受容するストーリーを読み、共感理解しながら英語力を総合的に向上させて頂上タスクを行うことによって、文学テキストは、文学の読みによって得られる能力とともに4つの英語能力の向上に資することができる。

(5) 授業案

以上のことを踏まえ、かつ日本の学生の実情を踏まえて英語の授業案を構築し、実践した。ここでは文学を基盤とし、文学の読みと仕事の現場を結びつけた授業案の一つを挙げ、成果を述べる。大学2年生の経営学部(46名)の総合英語のクラス(後期の授業)での実践である。授業の目標は以下のようにした。「日本の様々な職種に就く人々の調査からわかった英語の運用能力の習得を行う。他者への共感理解に基づいた正確な英語理解と英語運用能力の獲得である。そのために「文学的」な英文の読みにビジネスシーンを組み合わせた授業を展開する。将来のキャリア選択、専門の授業、将来の学習計画にも結びつけられるようにする」。また、日本の学生は他国に比べて教室内で孤独感や無能感とい

った社会的排除の感情を強くもっていること、現代社会が資本主義の競争原理で動いていること、ならびにグローバル経済社会は排除の構造をもっていることを憂慮して、言語によって自己も他者も幸福感に満ち、より良い人間関係を構築できる英語力を習得するという目標も据えた。つまり、英語の授業が相手にするのは「客観的数値」ではなく、人間それ自体であるという立ち位置である。そこで到達目標として次の3つを掲げた。4技能を網羅して、英語が正確に運用できる。

英語がただ使えるだけでなく、他者への共感的理解から適切な英語の理解や表現ができる。文化的差異から他者や自己を考えた英語の運用ができる。これらを実現するための形式的方法は次の通りである。授業を重ねるごとに英文のグレードを少しずつ上げていく。各職種調査から英語使用の実態を動画やテキストで確認できる、筆者が作ったウェブサイト「E-Job 100」(<http://www.e-job-100.sakura.ne.jp>; 2009年度～2011年度の科研費による研究で構築したウェブサイト)を利用して、求められる英語力を確認する。

4技能を網羅した英語力を高めていく。そのため、毎回頂上タスクを設定し、それに基づいた英文の読解やアクティビティ等を4技能満遍なく行う。グループに分けた英語による発信も行う。常に他者のことを考えた英語運用力を意識し、実社会で他者との関係を英語で生きている力を身につけていく。以上のことから、「文学的」英語理解とビジネスシーンでの英語理解を交互に、且つ融合しながら英語運用を練習する。

以上を実現するための毎回の授業内容は次のとおりである。

グローバルズムと日本と英語について。なぜ「文学的」英語力なのか。

英語によるさまざまな紹介 1 (Ice-breaking、パラグラフ構成)

英語によるさまざまな紹介 2 (英会話力向上の方法と練習)

“The Gift of the Magi”を読む (共感的理解、言語による良好な人間関係、社会的排除の軽減)

“The Gift of the Magi”を読む (会話による良好な人間関係、社会的排除の感覚の軽減)

“The Marriage of Convenience”を読む (自己の内側から感じ考える)

“The Marriage of Convenience”を読む (文化的差異へのまなざし、多元的解釈、イデオロギー、共感的理解、批判的志向。ディスカッション、発表)

ビジネスシーン (対人関係、ディスカッション、意見を傾聴する・読む、課題解決)

ロールプレイング (文化的差異を英語で体験する)

ポライトネス (文化的差異と英語の表現)

ポライトネス (ビジネスシーンに広げて)

ケーススタディ 1 (グローバル・ストラテ

ジー、4P理論の理解、文化的差異と他者への共感的理解を踏まえた英語での仕事)

G-TELP (総合英語の授業に義務づけられた試験。学生は一定の点数が取れない場合、単位を取ることができない。)

ケーススタディ 2 (発表。総合的タスク)。エマソン、ハクスレーらのエッセイを読む (新しい視線の構築とまとめ)

毎回の授業内容に一つ一つ触れながら、授業全体の流れを説明しておく。初回は授業全体の説明、ならびに授業内容について本論で述べた日本社会と英語の必要性の現状について説明を行った。また、先に触れた筆者の「E-Job 100」を紹介し、随時見るように述べた。

2回目は、教室内でのより良い人間関係を構築するために ice-breaking を行った (同アクティビティは英語で行った)。まず、学生にビンゴのマスを9つ作らせる。クラスのほかの学生に氏名を尋ね、3つの質問をし、回答を書き留める。これがマスに書き入れる情報である。それを9人分行わせる。これらはすべて英語で行わせる。その後、ビンゴの要領で3名を選ばせ、その3名について、あらかじめ用意した物事を紹介する文章の型を使って英作文をさせた。言い換えれば、パラグラフライティングの方法を教えた。

3回目の授業では、2回目の授業で書いた英文をすべて暗記させ、暗記した文章を用いてさまざまなものを紹介させることで、英語が話せるようになること、また話すことを体験させ、かつ英会話の習得の方法を教えた。以降、解説した英会話の習得の方法にしたがって練習してもらった成果を学生が体感できるようにするべく、毎回の授業の最初の時間を使って、“What did you do in the last weekend?” をテーマとする英会話を学生同士で行ってもらった。はじめは3分程度、以下回を追うごとに時間を延ばしていき、最終的に最長20分程度英語だけで会話ができるようになった。

4回目と5回目の授業では、O.ヘンリー(O. Henry)の「賢者の贈り物」(“The Gift of the Magi”)をテキストとし(リライト版)、人間の思いやりを描いた文章をじっくり味わってもらったのち、クラス内の複数の人々の長所を3つ見つけ、“I like you because ...”といった文を用いて互いに英語で褒め合ってもらった。これにはいくつかの狙いがある。まず、脳科学者のダマシオにしたがえば、何かを感じない限り、人は何も考えようとしないうえ、次回以降の授業内容を考えて、学習者の情緒に訴えるテキストを使用した。また、先に触れたように、日本の学生は学校や教室で居場所のなさや無能感を感じる傾向にあり、このことが教室での活発な学びやアクティビティを阻害していると考えられるため、学生たちの孤独感や排除の感覚を軽減し、彼らが互いに受容されているという感覚を持てるようにしようとも考

えた。これは協働学習を促進する要素ももっている。

6回目と7回目の授業では、5回目の授業で長所の指摘とともに褒めてもらった経験をもとにウィリアム・サマーセット・モーム (William Somerset Maugham) の「政略結婚」 (“The Marriage of Convenience”) を読ませ (リライト版) て「幸せとは、期待しないことである」というテーゼを個々の内側から考えさせ、英語で意見を述べてもらった。すなわち、体で感じたばかりの幸福感を客観視させるということである。また、テキストが多文化的内容になっているため、多元的な視点に立ったテキストの解釈や「幸せ」についての考察ができることも目指した。

6回目の授業でテキストを読んでもらい、英語やテキストの背景等について解説を行ったのち、7回目の授業でテキストならびに「幸せ」について多元的解釈をしてもらった。具体的な方法であるが、まず「幸せ」について、結婚について (本テキストの「幸せ」は結婚を文脈としているため) また人間関係について、サマーセット・モームの時代のイギリス、ならびにテキストに出てくる複数の国や地域の時代、政治、文化、宗教、社会的現実など多元的な文脈から考えさせる。それをもとにテキストの内容について多元的に解釈させる。その後、「幸せ」の意味を巡る差異と共通点を踏まえて、文化的社会的構築物としての人間と、類としての人間にとっての「幸せ」の意味、ならびに「幸せとは期待しないことである」というテーゼについて意見を述べてもらう。

8回目の授業では、前回の授業を受け、「幸せ」な人間関係が仕事でも最も重要であることを理解してもらうと同時に、職場において異なるジェンダーや文化に属する人々の間で人間関係が崩れたときの英語の会話文を読ませ、どこに問題があるのか、会話文を分析し考察してもらった。ここで学生に留意させたかったことは、文化的差異に目を向けない他者の無理解と英語におけるポライトネス表現の失敗である。前者については6、7回目の授業で行ったことに即して考えさせ、後者については、テキストから一步引いてテキストを批判的に読み分析すれば適切な言葉や文法が選択できるようになるために、より良い言語習得が可能になるという研究者たちの先行研究を踏まえると同時にそれ以前の授業の内容とも関連させ、相手の良いところを見つけて言葉にしても、英語の表現が不適切であれば誤解を招くことを理解してもらい、適切な表現ならびにその選択について学んでもらった。

そこで、9回目の授業では、まず文化的差異によるコミュニケーションの成否を体験してもらうため、英語の会話文に続けて「次の一言」を選択し、その選択によっていくつもの場面に分かれて話が進んでいくロールプレイ式の英文を読ませた。親切心から生ま

れる他者への言葉や行動が文化的な誤解のために勘違いされること、言ってみれば、やさしさのすれ違いの悲劇が体験できるようになっている。この英文を読むことで、他者の立場に立ったコミュニケーションの重要性を認識してもらった。

続いて10回目の授業では英語の表現が英語圏文化と密接な関係をもっていることを解説し、ポライトネスに焦点を当てた英語表現の使い方を教えた。具体的には謝罪と感謝の言葉である。加えて、「もし自分であったらどうやってほしいか」をまず考えさせ、それでは「相手もそう言ってほしいであろう」という思考を介在させて謝罪や感謝の適切な表現を選ばせることで他者を尊重したコミュニケーションの力を育もうとした。

11回目の授業では、10回目で行った謝罪と感謝以外の場面と表現に範囲を広げ、日常生活とビジネスの両場面において、作文や会話を行った。はじめは紙面で、のちに会話の中に適切なポライトネス表現を取り入れて練習を行った。

12回目は、多元的解釈と他者の尊重を仕事の内容に広げるため、グローバル・ストラテジーを使ったケーススタディについて英文テキストを用いて理解してもらった。グローバル・ストラテジーとは、企業が異なる国や地域で販売を促進するために、販売先の文化、慣習、思惟様式、法、社会的現実等、多元的な解釈をもとに、自国と同じ製品 / 異なる製品を、自国と同じ製品名・広告で売るか売らないか、あるいは新製品を作って販売するのか、5つの組み合わせをローカルとグローバルの視点から決定する戦略である。5つの組み合わせについて、その例を英文で読ませ、インドで日本製の洗濯機を、またアメリカと中国で日本製の自転車を販売する際のストラテジー決定を考えてもらった。

13回目の授業では、義務づけられた G-TELP の試験を行い、14回目の授業では12回目まで学んだグローバル・ストラテジーを用いて、インドでの洗濯機販売とアメリカ・中国での自転車販売のケーススタディについて英文で簡潔に述べさせた。15回目の授業では、先述したエマソンらの英文を用いて授業で行ってきた内容を総括した。

全体的なことについて付言しておく。授業で扱った内容のうち時間の関係から十分な解説ができなかったものについては参考文献を紹介し、学生に随時参照してもらうようにした。また、授業中は、必要に応じて語用論や文法の説明 (ただし、訳読からの脱出を目指した意味の範疇化や認知文法による説明) を行ったりしたほか、さまざまな方法で英語力の向上を試みた。

さて、この授業の成果であるが、義務づけられている G-TELP (Level 3) が学生の単位を決定する。学生は1年生や2年生前期にも G-TELP を受験しており、本授業を受けた後の G-TELP の点数を比較することができる。本授

業では G-TELP の得点を向上させる授業を一度も行わなかったが、結果的に点数が向上した。TOEIC 換算にすれば、平均点 410.369 が 432.537 となり、22 点以上の上昇が見られた。また、自由書式で授業評価も行ったが、回答者 46 名全員から授業に満足しているという回答を得た。改善点を指摘する記述はなかった。なお、受講生たちはそれまで英会話だけ、TOEIC 対策だけという授業ばかりを受けてきたらしく、今回のような授業を受けるのがはじめてとのことだった。補足であるが、「賢者の贈り物」を読ませた授業終了後、学生たちが筆者のもとを訪れて、この CD はないかと尋ねてきた。理由を尋ねてみれば、「賢者の贈り物」にとても感銘を受けたとこのことで、こうした名作を読むだけでなく、聞くことでリスニング力も高めたいと申し出てきたのであった。彼らの反応は、文学作品がいかにか効果的な教材であるのか、また文学作品がいかにか人の情緒に訴え行動を喚起する大きな力をもっているか、確認できる事例である。

本研究で得られたことは、英語教育は英語力向上を自己目的化するのではなく、文学との融合において、真に英語を用いてグローバルに働ける人を育てられるということである。それを阻む傾向にあるのが職業教育主義であるが、職業教育主義は日本だけでなく世界の広い範囲に蔓延している。このことから、本研究の成果を国内のみならず国外にも学会や書籍、論文等で広く発信した。国外からの反応もよく、国際的研究プロジェクトに発展しつつある現状である。ここに挙げた授業案以上に文学を用い、一回ずつの授業において文学と仕事の現場をつなげた英語教育の案を考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

鈴木 章能、世界文学とトランスレーション・スタディーズ その今日的意義・方向性・方法と文体研究への接続、文体論研究、62 号、査読有、2016、pp. 17-40

鈴木 章能、国民文学、世界映画(ワールドシネマ)としての「ラスト , コーション」世界文学の視点から考える多国籍世界映画試論、片平会編『片平五十周年記念論文集 英語英米文学研究』(金星堂) 査読有、2015、pp. 205-211

Akiyoshi Suzuki, How Should We Read Literature from a Certain Area from the Viewpoints of Other Language-speaking Areas?, The IAFOR Journal of Literature and Librarianship: Winter 2014, 3(1), 査読有, 2014, pp. 9-39

〔学会発表〕(計 14 件)

Akiyoshi Suzuki, Alerts to a Dystopian Nightmare of Dehumanization, American Comparative Literature Association 2016,

2016 年 3 月 18 日, Harvard University (Boston, U.S.A)

Akiyoshi Suzuki, Is There a Teacher in This Class?, The 7th Annual Liberlit Conference for Discussion and Diffence of the Role of 'Literary' Text in the English Curriculum: Intercultural Limits and Liminality, 2016 年 2 月 22 日, Tokyo Woman's Christian University(東京都杉並区善福寺)

Akiyoshi Suzuki, Academic Barbarism?, The 54th Domestic Conference of The American Literature Society of Japan, 2015 年 10 月 11 日, Kyoto University(京都市左京区吉田本町)

鈴木 章能、英語圏文学の使い方 「生きる喜び」を感じる英語授業、言語教育エキスポ 2014 外国語学習のための動機づけ: シンポジウム 4「文学指導は学習者をどのように動機づけるか」、2014 年 3 月 9 日、早稲田大学(東京都新宿区戸塚)

鈴木 章能、中庸の英語教育: 教育学、仕事現場の声、世界文学の視座から、第 85 回日本英文学会全国大会シンポジウム、2013 年 5 月 26 日、東北大学(仙台市青葉区片平)

〔図書〕(計 7 件)

鈴木 章能他、開成出版、Language Gaps Between Academia and Industry - How to Connect University Language Classes with Industry Needs -, 2016、82 (pp. 23-58)

Akiyoshi Suzuki et al, New York: Routledge, The Future of English in Asia: Perspectives on language and literature (Routledge Studies in World Englishes), 2015, 302 (pp. 207-223)

鈴木 章能他、開成出版、ENGLISH SKILLS: The Power for Professional Success、2015、120 (pp. 1-54)

〔その他〕

ホームページ等

E-Job-100

(<http://www.e-job-100.sakura.ne.jp>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 章能 (SUZUKI, Akiyoshi)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号: 70350733